形成的教育実習の実践研究

千葉　　昇

キーワード：形成的教育実習 , 入門期・充実期・発展期・総合期 , 教職履修カルテ , 自己評価ルーブリック

1，はじめに

教育実習は，教職を目指す学生が初めて教師の立場として，総合的に現場実践を学ぶ場である。その実習期間は 3 週間ないし 4 週間と短いながらも，朝から放課後までを子どもたちと共に過ごす濃密な学校現場の共有経験となる [(1)]。

大学の教職課程では，残念ながら生の子ども・子ども集団と生活をし，授業をする機会はほとんど無い。模擬授業にしても，あくまで学生が子ども役を果たすために，限りなく優しく子どもの予想を先回りして実践が成り立つ場合が多い。例え教育ボランティアの経験を持っていたとしても，いざ子どもの実態を踏まえた実践となると予想を超えた子どもの反応に戸惑うのが常である。この実習経験をいかに実習生の中に積み上げるかは，現場育成の重要な役割であるとともに，実習生にとって価値と意味のある経験とするには，形成的な教育実習を積み上げることが不可欠となる。本稿は，その教育実習へ取り組む視点を定め，形成的な内容構成への手がかりを考察する取り組みである。

2，教育実習に於ける 4 段階育成とその実践計画

4 週間の教育実習を想定するとき，その形成段階を，「入門期→充実期→発展期→総合期」の 4 段階で考えることができる [(2)]。

入門期は，子どもとの出会いで始まる実習スタートの 1 週間である。

子ども，そして子ども集団との人間関係をつくる中で，一人ひとりの実態把握と子ども集団の特質をつかむ実習の土台づくりの 5 日間である。これが今後の実習に於ける学習・生活両面の方向付けとなる。この出会いの期間は，教師としての実態把握期間ではあるが，言うまでもなく子どもたちにとっても，先生としての実態把握のお試し期間でもある。挨拶を始め様々なコミュニケーションを自分から働きかけると，子ども一人ひとりとのパイプが広がっていく。特に幼稚園や小学校では，遊びを通しての子どもとの触れ合いの中では，子どもたちは本音と真の姿を見せてくれる。子どもたちが在校している内は，常に子どもたちの中に身を置き，積極的に個別に働きかけて，子ども集団の中から子どもを知ることが実態把握に繋がる。

また子ども集団の特質としては，個と集団の構造的な人間関係を把握し，その特徴を理解する必要がある。これは生徒指導の土台となるものである。

更に担任の指導観察を通して学級文化を捉える必要がある。発言の仕方や話し合いの仕方など授業進行を支える学級ルールの把握は，今後の実践にとって欠かせない要素となる。

これらの実態把握は，もちろん入門期だけで終わるものではなく，今後の子どもとの交流の深まりとともに形成的に積み上げられいくものである。

2 週目の充実期は，学習・生活の両面の初めての指導を経験して，失敗と成功に学ぶ週である。

場合に寄っては，1 週目の終わりから実践に入ることもあるが，この週から授業実践に挑む場合が多い。子ども理解を進めるとともに，基本的な学習指導の進め方を学ぶ位置づけとなる。また，生徒指導への関わりから，朝や帰りの会の学級運営への教師の関わり方を経験し学ぶ機会ともなる。

初めての授業実践に関しては，事前に大学で学んだ教材研究と指導案づくりに則って，1 次案を作成し指導を仰ぐ段階となる。その修正を経て 2 次案作成と子どもが実際に授業で立ち向かう学習材の準備を進め

る。授業本番で使用する提示資料や板書カードは，授業準備の最終段階となる。必ず実際の教室で黒板や情報機器を試すことは欠かせない事前準備である。得てして実践が旨くいかない場合が多いのが初めての実践である。しかしそれが学びの多い初めての実践の価値である。「初心忘るべからず」とは，初めての実践からの学びを忘れずに取り組み続けるべきと言う戒めとして心得るべきことと考える。

3 週目の発展期は，学習と生活の土台である学級経営の理解を深め，実践的な学習指導の幅を広げる週である。 実践予定が詰まってきて，指導案の仕上げに本番用の板書準備や資料制作，並行して次の授業の 1 次案作成に修正と追われる日々となる。更に最終週の研究授業の準備も始める時期ともなる。子ども一人ひとりとの信頼ももう一段深まり，生徒指導に於いても担任的役割が増してくる。学級全体をコントロールする経営にも関わることが増えていく。子どもとの学校生活に慣れてきたとはいえ，体力がものいう山場ともなる。子どものために動くことの喜びとやりがいにも目覚めて教師としての醍醐味を実感して，教師としての自分の資質について振り返る時期となる。予測される子どもの反応が少しずつ具体化して，授業進行の過程や配慮すべき留意点も見通せるようになってくる。「子どもと共に創る授業」の意味も体感できるようになってくるのがこの段階である。生徒指導に於いても，子どもと共に次の一歩を考えるカウンセリングマインドの大切さを実感できる段階である。忙しさの中でも，先ずは子どもと共に動き，考えることを最優先して，子どもという鏡に映し出される自分を見つめることを大切にしたい。

最終週となる 4 週目の総合期は，3 週間に渡る実習経験を基に，研究授業や半日・1 日指導で担任としての役割を総合的に学ぶ週である。

授業実践では，研究授業という形で，今持てる力を出し切って授業作りと実践に挑戦していく実習の仕上げ段階である。この挑みの中での研究授業の実践こそ，教師を目指す自分の原点と現在の到達点となる現点の自覚となる。そして今後の自分の課題も見い出してくれるものとなる。

生活面でも，朝から帰りまでの学校の 1 日に携わっていく担任経験の段階となる。4 週間というわずかな期間ながら，共に築いた子どもとの信頼を責任ある立場から総合的に問い直すことになる。これもまた，教師としての原点と現点を見つめ，次なる積み上げの一歩を振り返ることとなる。

総合期の終わりは，子どもたちとの別れの場面となる。濃密な 4 週間は，子どもとの信頼関係を積み上げた 4 週間である。その最後の場面は，教師を目指す次の自分の一歩を自覚し，意志を決定づけることになるかもしれない。改めて自分の 4 週間を，子どもの声や実習日誌からじっくり振り返ってみる必要がある。

3 週間実習の場合は，入門期と充実期が合同週となり，子どもとの信頼関係づくりに一層の努力が求められる。また，副免許取得等の 2 週間実習の場合には，入門期・充実期と発展期・総合期の 2 週間実践となり，すでに 1 回目の教育実習を経験していることを前提にした実習となる。期間の短さは，より大きな努力と準備を求められるために，事前の準備とともに日々の見通しを持った取り組みが必要となることを心得たい。次頁にまとめたものは，形成的な 4 週間実習を段階的に整理した「小学校教育実習スタンダード」の改訂一覧表 (3) である。教育実習の見通しと振り返りとして活用したい。

	週目標	学習指導	授業時数	生徒指導（生活指導）	講話・指導	備考
第1週	**入門期** 子ども・子ども集団と出会い，親しみ，その実態を掴むとともに，初めての授業実践に挑む。	○授業観察とプロトコル（授業記録）の作成 45 分の学習過程と子どもの反応 ○ＴＴ授業補助 子どもの個別対応 ○教科学習指導（初授業） 指導案形式	1	○子ども・子ども集団との出会い ○学校・学年理解 ○学級理解と学級経営方針（学級文化） ○給食指導	○学校理解と実習の心構え（校長・教頭講話） ○学級の特徴と経営（担任） ○指導案の作成と教科指導（教務・担任）	・出勤簿と勤務 ・実習メモ ・実習日誌 ・指導案形式
第2週	**展開期** 子ども理解を進めるとともに，基本的な学習指導の進め方を学ぶ。	○授業観察とプロトコル（授業記録）作成 導入の工夫とアクティブラーニング ○教科学習指導（1 回目～） 導入―展開―まとめ ○ＴＴ授業補助 子どもの個別対応 ○他学年の授業観察	3 ～	○基本的な生活指導 ○低・中・高学年の発達段階の理解 ○給食指導・清掃指導 ○朝・帰りの会の指導	○生徒・生活指導講話（主任） ○児童の発達段階（各担任等） ○保健講話と特別支援（保健主事等）	・生徒指導と特別支援 ・保健室補助
第3週	**充実期** 学級経営の理解を深め，実践的な学習指導の幅を広げる 。	○教科学習指導（2 回目～） ○専科・道徳・領域指導 ○研究授業検討	5 ～	○学級経営の理解を深める。 ○小集団と個別指導 ○学級事務補助 ○給食指導・清掃指導 ○朝・帰りの会指導	○特活講話（主任） ○研究授業指導（学年・担任等）	・係活動 ・委員会 ・クラブ活動
第4週	**総合期** 3 週までの実習経験を基に，研究授業や半日・1 日指導で総合的に学ぶ。	○教科学習指導（3 回目～） ○研究授業と協議 ○半日・1 日指導	1 4 ～ 6	○半日・1 日指導 ○小集団と個別指導 ○給食指導・清掃指導 ○朝・帰りの会指導	○研究授業協議会 ○ 4 週間実習の振り返り ○実習を終えて（校長・教頭・教務・担任）	・片付け ・実習評価
	※生徒指導を土台にした総合的な実践的指導力を身につけることこそが，確かな今後の財産になります。	**指導安作成** ・指導案は，事前に 1 次案・最終案を提出し指導を必ず受けること。 ・研究授業は，全教員に配布すること。 ・小学校の担任は，基本的に全科指導。国語・社会・算数・理科は，各 2 時間以上実施。音楽・図工・体育・道徳は，1 時間以上実施。そして・家庭科・生活科・総合 ・英語活動は，担当学年に応じて実施。 ・指導案はもちろんのこと，板書計画に基づいた板書カードやワークシート等，授業の実際に使用するもの（学習材）の事前準備も欠かせません。子どもの作品には必ず目を通し，コメントして返却することも大切。 （指導案の作成については実習スタンダードを参照）	14 時間以上 ※実施時数の多さは，もちろん実践力伸長に結びつきますが，確かな指導案に基づいた確かな指導こそが更に大切です。	**出勤簿** **実習日誌** ・実習日誌は，次の日の朝までに必ず提出し，指導・検印を受ける。（実習日誌の書き方については，実習スタンダード参照）	・各講話・指導では，必ずメモを残し実習日誌の中に項目をあげ，自分なりに気づいた点，考えた点をまとめて自らの財産にすること。 ・研究授業の協議会を通して，各先生からの指導を受け止め，次の一歩に活かす。 ・4 週間実習の振り返りで自分成果と課題をまとめる。	※実習の心得（実習スタンダード）を繰り返し読み返すとともに，実習校からの留意点を守ること。

3. 教育実習を振り返る

1日24時間をフルに活用してきた充実の教育実習を終えると，事前指導の学びから事後指導の学びを迎える段階となる。現場実習の感触を失わないうちに，教師を目指す自分の次の一歩のステップアップのために，確かな成果の分析を整理しておく必要がある。もちろんわずか4週間の教育実習が全てを定めるものではないが，自分の教師としての可能性を見いだすには十分な体験となる。

例えば新聞形式で整理するとすれば，授業力として「忘れられない授業場面」を想起して，学びのキーワードとしての見出しを付けながら，4週間で学んだ授業実践力を振り返る必要がある。また生徒指導力としては，「忘れられない生活場面」を想起して，見出しを絞りながら4週間で学んだ生徒指導の実践力を振り返る事が欠かせない。

更に，変わり続ける児童・生徒の今を把握するために，子どもだった当時の自分自身と比較しながら「子ども新発見」を，前述二つの振り返りを基に記しておくことも大切なこととなる。

最後に，社説とすべく記すまとめは，実習の成果と残された自分の課題の明記，そしてこれから取り組むべき次なる一歩の方向付けとなる。

4，教職履修との関連

これらの土台には次頁に記した教職履修カルテ[(4)]に示した6領域6観点の36項目の自己評価が連動しており，教職課程全体の大きな指針となっていることは言うまでもない。後の頁で示した6領域6観点と自己評価ルーブリックは，1年から4年までに修得すべき段階的指標である。これは，4年間の教職履修を見通したものであり，6領域各6観点を，1年次，2年次，3年次，そして実習を挟んで段階的に積み上げる4年次の到達目標と履修状況を示したものである。そして，レーダーチャートで指標化し，その変化の根拠を見える化している。やはりいずれも，形成的評価を基に構成され，次なる一歩を見つめるものとなっている。

その領域設定は，「教師としての基盤づくりとなる**教職基礎**」「子どもの力を引き出し，魅力的・効果的な授業力としての**授業・保育実践**」「自己指導力を育む**生徒生活指導**」「子ども・子ども集団を共に営む**学年・学級経営**」「担任としての総合的実践力の**現場実習**」「創造的な教師となる探究力とリテラシー修得の**新しい教育動向**」の6領域で，更に各6項目の計36項目で自分教師力を振り返るものとなっている。

その中でも，教育実習に於いては授業保育実践と生徒指導が実習の核になることは言うまでもない。この指導案構成から授業実践に至る学びについては別稿を参照されたい[(5)]。

学び積み上げる学生たちは，毎年年度末にこの自己評価ルーブリックを指標として振り返るとともに，各領域の次年度の行動目標となる具体的な目標設定へとつなげていく。まさに教職履修の形成的評価の具体化を図ったものとなっているのである。

4年次の「教職実践演習」においては，実習を踏まえた振り返りとなり，レーダーチャートが大きく広がる場面が多く見られる。そして教職現場に出るまでの残り期間で積み上げる課題を整理することとなる。

現在このデータ整理は，赴任後の4年間も継続してその変化の分析も継続している。

教職履修の 6 領域 6 項目

(1) **教職基礎**　教師として求められる教育的愛情や熱意，使命感，責任感，及び豊かな教養
①教師像（使命感・責任感・意欲）
②教育的愛情（熱意・根気・フォロアーシップ）
③表現力とコミュニケーション力
④協働意識（チームワークとリーダーシップ）
⑤児童心理と発達
⑥法規理解と服務

(2) **授業・保育実践**　子どもたちが持つ能力を発揮させ，授業を魅力的且つ効果的に設計・立案し，実践する力の修得。
①教材研究（教材解釈と学習材研究）
②指導計画・指導案の設計・作成（問題解決の学習過程・学習活動・評価）
③児童理解（受信と交流）
④授業実践力（発信と交流）
⑤個への対応
⑥授業評価

(3) **生徒生活指導**　確かな児童理解に立脚し，個や集団との信頼ある人間関係を築き，問題に対して的確に対応・行動し，自己指導力を育む力の修得。
①児童理解とカウンセリングマインド（受信）
②生徒指導力（発信）
③個別指導（個・集団への指導）
④進路・キャリア指導
⑤保護者対応
⑥特別支援を要する児童への対応

(4) **学校・学級経営**　子ども理解に基づいて，学年・学級を経営していく指導・支援力と協働力，そして説明責任能力の修得。
①学校・学年・学級理解
②学年・学級経営（協働力と経営実践）
③集団指導（全体・グループ）
④個別指導
⑤特別活動と学級指導
⑥アカンウタビリティー（説明責任）

(5) **現場実習**　子どもとの豊かな関わりを通した，担任教師としての総合的な実践力の修得
①教育実習　②観察実習（授業観察とプロトコル）
③介護・特別支援実習　④ボランティア実習
⑤研修・研究会参加　⑥その他の実習経験

(6) **新しい教育動向**　教育の新しい動向や施策に基づき，創造的な教師となるための探究力とリテラシーの修得。
①総合的学習等
②情報リテラシー
③英語活動等
④社会参加
⑤教育改革の動向
⑥最新の教育情報

教職履修カルテ（自己評価用ルーブリック）　※学修項目は□にチェック

	Ⅰ．教職基礎	Ⅱ．授業・保育実践	Ⅲ．生徒指導	Ⅳ．学年・学級経営	Ⅴ．現場実習	Ⅵ．新教育動向
優 4年次	□教師として求められる教育的愛情や熱意，使命感，責任感，コミュニケーション力を高め，豊かで幅広い教養を修得している。	□子どもたちの持つ能力を発揮させ，授業や活動を魅力的かつ効果的に設計・立案・実践する力の修得を積み上げている。	□多面的な子ども理解に立って，個や集団との信頼ある人間関係を築き，問題に対して的確に対応・行動し，子どもの自己指導力を育む力を修得している。	□確かな学級理解に基づいて，学年・学級を経営していく指導力・支援力，そして説明責任能力を修得している。	□ 理論と実践の往還の中で，子どもとの豊かな関わりと活動を通して，総合的な実践的指導力を修得している。	□教育の新しい動向や施策に基づき，創造的な教師になるための探究力とリテラシーを修得している。
良 4年次	□自らの教師像を求めて，教育的愛情や熱意，使命感，責任感を求め，豊かな教養の修得を積み上げている。	□子どもの実態を踏まえて，目標が確かで効果的な授業を設計・立案・実践する力を修得している。 □各教科演習	□確かな子ども理解に努力して，個や集団との信頼ある人間関係を築き，問題に対応・行動し，子どもの自己指導力を育むことに努力している。	□子どもの学年発達・心理を踏まえて，その学級の特徴を理解して，指導力・支援力の修得に努力している。	□子どもとの多様な関わりを大事にして，実践的指導力の積み上げに努力している。	□教育の新しい動向や施策を理解し，教師としての探究心とリテラシーを高める努力をしている。
可 4年次	□自らの教師像を見つめ，教育的愛情や熱意，使命感，責任感を自覚し，豊かな教養の修得に努力している。	□子どもの実態を基に，目標を立てた基本的な授業を設計・立案し，実践しようと努力している。 □卒業研究	□子ども理解に努力して人間関係を築き，問題に対して基本的な対応・行動し，子どもの自己指導力を育むことに努力している。	□学年・学級の特徴を把握し，経営していくための基本的な指導力・支援力の修得に努力している。	□子どもとの積極的な関わりを通して，実践的指導力の修得に努力している。 □教育実習 □教育実践演習	□教育の新しい動向に目を向け，教師としてのリテラシーを積み上げるる努力をしている。
実習前 3次	□ 子どもの発達段階・心理を理解して 自分の教師像を構築し，豊かな教養の獲得に努力している。 □教育法規	□子どもの主体的な学びを大事にして授業構想を考え，アクティブラーニングを組み，実践することができる。 □各教科教育法 保育内容の指導法	□子どもの発達段階・心理の理解に努力して子どもに正対し，共に考えることができる。 □生徒・進路指導 □特別支援教育	□学級経営を支える教師の役割を理解して，個と集団に対することができる。 □教育相談	□子どもとの基本的な関わりを通して，実践的指導力の修得に努力している。 □介護等体験	□新学習指導要領の 3 つ学びを理解して現代の教育課題への対応について考えることができる。 □総合的学習
2年次	□学びや子どもとの触れ合う経験を通して，自分の教師像の柱立てをすることができる。 □教育・発達心理	□授業における教師の働きを理解して，子どもと共に創る授業を考えることができる。 □幼児と保育内容 □教科の基礎・概論 理論と実践	□カウンセリングマインドに立って子ども心の動きを受け止め，正対する中で共に考えることに努力している。	□学級経営は，個と集団の理解を土台として，指導と支援で成り立つことを理解している。 □道徳教育	□自分から子どもに働きかける関わりの中で，子どもの実態把握に努力している。 □教育ボランティア	□現代の基本的な教育課題と新しい動向の理解に努力している。 □教育方法と情報技術
1年次	□教師を目指した経験や契機を振り返り，自分の目指す教師像を構築しようと努力している。 □教育学の基礎	□基本的な授業の構成要素を理解して教材研究をし，子どもと共に創る授業を理解することができる。 □幼領域の専門事項	□子どもとの信頼ある人間関係を築くには，何よりも子ども理解が土台であることがわかる。	□学級経営は，個と集団の理解を土台として，子どもと共に作り上げていくことわかる。 □特別活動	□子どもとの実際の関わりの中で，現場から実践的に学ぶ努力をしている。	□自分の経験を振り返り，現代の教育的課題を柱立てして考えることができる。

5, 終わりに

「たかが 4 週間，されど 4 週間」という実習の格言は，4 週間の実習で教職のすべてがわかるわけではなく，自分の教職としての武器が存分に見いだせるわけでもないという「たかが」の例えである。ましてや他人の学級経営に支えられての教育実践経験であり，教職に就いた折には，自らの学級経営という土台作りから始めるのが常となる「たかが」の例えだからである。その苦労と努力を自ら積み上げてこその実践的指導力の必要性という意味なのである。

しかしながら，4 週間の実習日誌 (6) をじっくり読み返すとき，教職における自分の片鱗を見い出し，教職への道を拓き，時には目指す決断をさせる 4 週間でもある「されど」であることに間違いはない。だからこそ，形成的教育実習の積み上げは，教職を目指す実習生のキャリア形成にとって必要不可欠になるものと考えている。

しかしそこには，実習経験が全ての実習生にとって共通ではないという問題が横たわっている。

先ずは，子ども・子ども集団も違えば，学びの段階にも大きな差違があるという個別事例的問題がある。発達段階が 6 年間に及ぶ小学校では，その差違が最も大きく，学習・生活集団としての育成の差違も多様で個別の実習経験となる。更に地域性の違いもまた子ども集団の差違を生み出す大きな要因となる。特別支援の必要な子どもの増加が顕著な現状の中での実習経験の違いは，教育現場が持つ個別対応の問題でありながらも，更に実習経験の大きな差違となって顕れてくる。

次に指導体制と指導内容の差違の問題があげられる。授業実践指導に於いては, 指導案形式の違いを始め, 指導計画から本時の指導に至るまで多様な幅を持つこととなる。もちろん受け止める実習生の力量と努力の差違の問題はあるものの，やはり大きな差違となって顕れる。これは，その土台となる生徒指導や学級経営に於いても差違となって，共通な形成過程にはならないものとなる。

そこで，体験と省察の往還を確保した教育実習を求めて，少しでも形成的共有のために作成したのが, 実習スタンダードの自己評価ルーブリックと教職カルテである。特に自己評価ルーブリック作成に当たっては，他大学のポートフォリオに学びながら (7) (8) 本学文学部教育学科初等コースの教職履修カルテの理念に立って (9) 6 つのカテゴリーを設定している。

現場実習の教育的機能の大きさは，学生として教師への未来の道を開くばかりか，新任教員としても心の支えになる経験になることが指摘されている (10) (11) (12)。その共通性と充実を図ることは，教師としての力量形成や職能的成長という教員養成過程にとっては忘れてはならない教育実習の課題であるものと受け止めている。

注

(1)　東京学芸大学附属大泉小学校編 2014「教育実習の手引き」pp.32-48

(2)　国士舘大学文学部初等コース　2021 教育実習スタンダード第 4 版改訂

(3)　国士舘大学文学部初等コース　2023 教育実習スタンダード第 5 版改訂 pp.1-2

(4)　国士舘大学文学部初等コース　2023 教職履修カルテ第 8 版改訂 p1

(5) 千葉昇　2019「学習指導案の構成」国士舘大学『初等教育論集』第 20 号

(6)　国士舘大学文学部初等コース　2022 改訂版　教育実習日誌

(7)　京都大学「京都大学教職課程ポートフォリオ」

(8)　西岡加名恵・石井英真・川地亜弥子・北原琢也 2013「教職実践演習ワークブック」ミネルヴァ書房

(9)　千葉昇　2011「教職実践演習の実践的課題―6 つのカテゴリーとレーダーチャート―」国士舘大学文学部人文学会国士舘人文学創刊号（通関 43 号）

(10) 米沢崇 2008「我が国における教育実習研究の課題と展望」『広島大学大学　院教育学研究科紀要』第 1 部第 57 号

(11) 永田孝夫 2012「教育実習における授業実習の現状と改善―「教育実習 記録」から実習生の授業実習を分析する―」『愛知大学教職課程研究年報』第 2 号

(12) 竹村精治・菅井悟・高橋伯也　2017「教育実習生の現状と課題―教育実習校による評価を通して―」『東京理科大学教職教育研究』第 3 号